

焼八千枚護摩供覚え書き

金本拓士

はじめに

「焼八千枚護摩供」は、『密教大辞典』によるならば、「八千枚護摩供」、あるいは「焼八千枚供」とも称せられ、その修法は「不動明王を本尊として乳木八千枚を焼く護摩法」¹⁾である。

縁あって筆者自身、平成二十三年と平成二十八年の二度、この大法を勤めることができた。第一回目の修行の概要については、『智山ジャーナル』第六十三号に掲載したとおりであるが、二回勤めたとしても、なかなか満足できるところまでには至らなかつた。これ以上勤める気力も体力もないが、せめて、これから「焼八千枚護摩供」を勤めようとされる後人のために、何らかの参考になればと思ひ、自身が勤めた修行の中での覚え書き程度のものを提示することにした。

『密教大辞典』の中には「作法・前行・日数等流派によりて所傳を異にせり」²⁾と記しているように、その修行内容も統一したものではない。ここでは、真竜記『八千枚作法聞書』³⁾中「八千枚要記」(以下「要記」)を基とし、

その上に自分が勤めた修行内容を書き加えることにした。

八千枚護摩について書かれた唯一の研究書に中川善教師の『八千枚護摩供』があり、また最近では、大滝清延師による『焼八千枚供／修法の心得』が出版され、修法を目指す者にとって手頃な手引き書が手に入るようになったが、様々な所伝がある中で、真竜本を選んだのは、一つには智山書庫所蔵の本であること。二つには、講伝所蔵の書、滝谷不動明王寺の先々代住職であった荒谷実乗師の写本があることから、智山所伝の次第であると推察したからである。

後述するように、実際筆者が勤めた修行と『八千枚作法聞書』とは相違する箇所もあるが、概ね修法の流れをうかがい知るのに確かな資料と言える。

一、『八千枚聞書』について

奥書によれば、次のように記されている。

右聞書一卷雖爲惡筆爲當用書写之

享保八雪月 於房州長須賀寶積院書写了

乗門 真竜 四十九才

(十三丁右)

この記述から、真竜は八千枚護摩をこれから修するために、この「聞書」を享保八年、すなわち一七三三年に書き写したものと察せられる。また、房州長須賀寶積院は、現在安房第一教区二十七番、佐野栄信住職が管理し

ている寺として現存している。

写本の内容は、最初に「八千枚作法」と題して、八千本の乳木伐採等について、正焼の時、典拠等いくつかの項目を取り出して、簡単に説明を付している。

次に「要記」。そこにおいては、八千枚護摩を修する上での要点を箇条書きにして書かかれている。この「要記」の最初に、

此の折紙一紙は極楽坊前法務有雅大僧正自筆記にして之を賜う 委き傳授は此の折紙を以て口説有る也

とあり、極楽坊前法務有雅は、『密教大辞典』によれば、宥雅（二六三四～一七二七）は「嘗て醍醐山下極楽坊を再興し、又釈迦院に住し、報恩院寛済に受法し當代事相の達匠として名あり。法務大僧正に任じ、……享保十三年八月一日寂す。」と記載されているので、年代から見ても、この宥雅から受けた折紙であることがわかるので、報恩院流の流れにある内容であることはまちがいないようである。

二、焼八千枚護摩供の要点

ここから、「要記」に従って、焼八千枚護摩供の修行の要点をみていくこととする。本文はゴチックで表し、その後説明を加える。

(一) 乳木を取ることに。

粗々先に記するが如し、乳木は行者自ら削り、調えること如法なりと雖も、乳木の數多き故に、親しく同房助け削るべきなり。而して唯だ如法丁寧に削るべきこと要なり。又、立ち枯れり木を用うべからず。必ず有乳木を用うべきなり 乳汁有る木なり。

(三丁右)

「先に記するが如し」とは、最初の「八千枚作法」の記述を示す。そこでは、成賢選『薄雙紙』の「先三春最初甲子日取木。若忽不可修行者。件日取始置之。至于其殘者不擇日時。他日取之無咎。」⁵⁾を取り上げている。

「三春」とは、新年から三月までの三ヶ月の期間をいう。その三ヶ月中の初甲子の日に乳木とする木を伐採する。もしすべてを伐採することができなければ、別の通常の日に取り始めて、残りを準備しておくのである。

また、乳木の材質については、『薄雙紙』に「長八指削之。調伏之時用苦練木三角削之」とあり、調伏法に使用する苦練木を使用するとなつては、「八千枚作法」の中には「師伝には息災調伏通じて苦練木を用う、若し多く苦練木を求め難ければ、通用木なるを以て、松を雜へ用うべきなり。黄櫨ハゼと云う木なり。樗ヌデ或いはヌルデと云う木なり。」と書かれているので、苦練木を用いても息災に通じるとし、また、求めがたければ、通用の木を用いても良いとされる。ここで通用とされるのは、松、黄櫨（はぜ）、あるいは樗（ぬるで）の木とされる。

苦練木については、サンスクリット名は ninda といい、梵和辞典では「にがい果実をもつ樹の名」と書かれている。日本では「センダン」とよばれ、また古名で「アウチ」とも称される。センダンの実は無苦練木といつて葉



写真 1

用とする。⁽⁶⁾ (写真1)

次に乳木の削り方にもいくつか伝がある。「八千枚作法」には、「圓く削る、息災には圓、調伏には三角にす。乳木の太さは頭指の大きなり。相伝の削り様は、根（もと）を太くし、其の頭を圓にし、木の末を細くし其の端を三角にすと。其の面之れあり見るべきなり。」とあるので、乳木のもとの面は丸くし、末の面は三角に削るように指示されている。また長さについては、六寸（約十八センチ）とする。ちなみに筆者が伝授された削り様は、もとは四角、末は丸く削るように指示された。

乳木八千枚を削ることについては「乳木は行者自ら削り、調えること如法なりと雖も、乳木の數多き故に、親しく同房助け削るべきなり。」とあるように、行者自身が削ることが如法であるとしながらも、手伝いの者の協

力を得て削ることも可能であるとする。

筆者の場合、初甲子の時、木を伐る業者と共に、伐採するセンダンの前で法楽をあげ、その後伐採し、その丸太をそのまま製材工場に持ち込み、厚さ十二ミリの板に切り分けた。その板を護摩木等の支具を加工し販売する木工業者に頼んで、乳木を一万本以上加工した。できあがったものを筆者自身が二ヶ月近くかけて末となる部分を丸く削って仕上げた。

(二) 前行の期間と食事について

三七日等 若し千日を以て護摩を修するを前行と為るは、至つて如法なり。爾の時は開白中日結願の三度に八千枚を修す。報恩院開山慧深大僧正は、千日の護摩の間百日毎に、八千枚を修したまうが故に、総じて十箇度八千枚なり。

(三丁右)

修行期間としていくつか説がある。ここでは、千日間の護摩を前行とすることが如法であり、その時は、開白・中日・結願にそれぞれ八千枚を修することが如法であるとするが、左記のように、「要記」では三七日、すなわち三週間の修行についての内容を説明している。

前行三七日時は、初めの七日間は隨食、第二七日の間は持斉にして修し第三七日の間は菜食の持斉にして修す、(菜食時は、朝には稗の粥又は蕎麦の粥、午の時は栗の飯、茄蒨(茄子・山芋)、薯蕷等五穀に非ざる物を食すべきなり。又、此の間は塩を断つこと、是れ一様なり。但し、塩を断ずると断ぜざるは行者の意樂に任す。阿闍梨は行者を見て、根の堪える堪えざるを相計るべし。

(三丁左)

「前行三七日」とあり、「要記」では、後に書かれてあるように結願の座を正行としている。その前行であるが、最初の二週間は、隨食。すなわち通常の食事をすること。次の二週間は、持斉。これは、昼以降食事をとらないこと。すなわち朝、昼の二食をとることである。そして三週間は菜食。これは、持斉と共に「五穀に非ざる

物」と書かれているように五穀断ちをする。

結願の日、一昼夜等 結願の前の日の菜食の持斎より翌日の結願の日の一日一夜断食なり。儀軌に云く。「断食一昼夜と(文)又、菜食作念誦數滿十万遍」と説けり。是れをもつて第二七日の持斎は本説に非ずと雖も、俄に菜食の持斎に至れば、行者疲れるが故に、先ず二七日の間持斎にして勤めて而して菜食持斎に至るが故に第二七日の持斎は菜食持斎の為めの試みの前行なり。

(三丁左)

最後の結願では、その前日に丸一日断食をした上で修行に入る。ここで「要記」は、第二七日の持斎は、『立印軌』に「菜食」と説かれているので、経軌の説に沿わないが、行者の健康を考慮して持斎としている。

筆者の場合は、三週間の修行の内、最初の二週間を前行。最後の二週間を正行とし、最終日を結願の座として、そこで焼八千枚護摩を勤めた。

その三週間の間の食事については、前行としての二週間は、持斎の精進食。残りの一週間は断食して結願の座に臨んだ。

(三) 慈救咒十万遍について

十万遍等を以て此の洛又は求聞持の如く正念誦に満たすに非ず。散念誦の本尊の咒に至つて満たすなり。

第三七日菜食持斎に始めるより、第十九座に至るまで一座毎に五千二百五十遍を誦する。十九座にして十万遍満訖るなり。而して第二十座には二千遍許り誦すれば第二十一座の結願の座には百遍許り誦す。此の二座の遍數

は十万遍の外にして、補欠分なり。遍数此の如くなれば結願の八千枚の座長くして行者疲るるに故に十万遍の洛叉を前の十九座の間に満ち訖り、後夜、日中の座には補欠分と為して少々満つるなり。又十九座の間も三時共に五千二百五十遍なれば、行者退屈する故に、後夜には静かにして気清（す）む故に、七千遍許りも誦し、初夜、日中の座には三千遍許り誦するなり。殊に日中には壇上壇外の掃除等の所作有るが故に、日中の座には遍數減すべくして宜しきなり。是れ又、阿闍梨相計るべし。行者の意案に任すべからずなり。（四丁右一左）

『立印軌』に書かれているように三週間の修行の間、行者は慈救咒十万遍を誦なえなければならぬ。その真言は一座行法中の散念誦の本尊咒の所で誦することになっている。「要記」では、最後の一週間のうち、第十九座目で十万遍を満たさなければならぬとする。そして、第二十座では二千遍ほど誦し、結願の座では百遍ほど誦すこととなっている。第二十座と結願の座の二座の真言は補欠分とする。それ故に第十九座までの一座毎の真言の数は、五千二百五十遍誦することになる。しかしながら、三座通して五千二百五十遍繰り返すと、行者は退屈、すなわち飽きて散漫となることから、後夜の気が澄んでいる時に、七千遍ほど誦して、初夜と日中の座では三千遍ほど誦しても良いとする。またさらに、日中の修法の準備、あるいは掃除の間もあるから日中の座の数を減らしてもかまわないとし、そのことについては阿闍梨に相談しながらやるべきであるとする。

「要記」では、一週間で十万遍の真言を誦すことになっているが、これについてもいくつか伝があるようである。矢板亮岳師（栃木北部教区寺籍二十八番観音寺先代）の『齊菜食念誦二十一万遍 断食八千枚護摩供修行』では、加行二週間で十万遍、正行一週間で十万遍の計二十万編を誦している。また、高野山真言宗池口恵観師の『焼八千枚護摩手鏡』によるならば、「毎日（初夜・後夜・日中）に常の如く不動護摩法を修し この廿一日の期間中

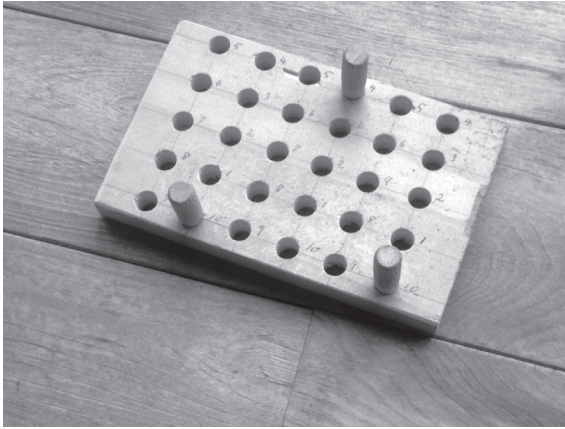


写真2

に不動護摩慈救呪十万遍を操作り……もし、二十一日間も都合によって修行出来ぬ場合、最略のものとして七日間を以て前行にあてる」と三週間で十万遍を誦すか、日数がとれない場合は一週間で十万遍を誦すこと記されている。ちなみに筆者の場合は、三週間で十万遍を誦した。また十万遍を誦する時、一座ごとに何遍誦したか数えなければならぬ。通常、四度加行などでは数珠によって数え、あるいは札拝行では大豆を器から器に移すことよって数を数えるが、十万遍誦するとなると、大豆をこぼしたり等で数えまちがいをしやすい。そこで、

滝谷不動明王寺に伝わる数取り取り器を参考させてもらい、(写真2)にあるように準備した。この数取り器は、百の位、千の位、万の位それぞれ十個の穴を開け、そこに木片を差し込み、数が満たされるごとに木片を移動させて数を数えた。

また付け加えるならば、荒谷純光阿闍梨から、二十一日間の毎座、護摩壇にあがる前に水行をし、結願の前の座が終わった後、結願の座に身体を整えるために温浴が許された。この水行については、『八千枚』にも「一 行水事 入道場之時必可用水也 非是當淨身器得氣力方法也」とあるように、ただ身体を浄めるだけでなく、氣力を得るために行うのである。

(四) 乳木の調え

乳木兼日削り調え、清浄水を濯ぎて洗う。当流には百支を一束とし、

天台三井には百八支を一束とす。細き繩を以て二た所結わえ、菜食七日の内、晝暫時、雨水に浄むべし。若し冬日、雨降らずんば、雪霜にて浄む。多く雨水に浄めれば、燃え難し、夜は薦を以て覆うべし、而して後堂の縁の便りの所に棚を設え十束宛て並べ置くべし。先々は行者見えざる様に置く。所以は何となれば、行者乳木の多くを見て、退屈を生ずべき故に。

(七丁右—左)

八千枚の乳木が調えられたら、それを清らかな水で洗うとされる。また、報恩院流では百支を一束とするが、天台三井すなわち寺門派の三井寺では百八支を一束とする。その一束を細い繩で二カ所結わえて、菜食七日の内、昼時に雨水で浄めるとする。もし冬の時期で雨が降らなければ、雪か霜で浄めるのであるとするが、堂外に乳木を置いて、自然に降る雨で浄めとしたのであろうか。夜は薦(むしろ)で覆っておくようである。

浄めた乳木を後堂、おそらく八千枚を修行する堂の後ろに、取りやすい所に棚を設置し、十束ごとに並べ置く。それは、結願の座の時、行者が行中に見えにくいようにするためである。

ここで、乳木を浄める際、自然に降る雨で浄めるように記述されているが、『八千枚護摩供』には、乳木の洗いが次のように詳しく記されている。⁹⁾

慶長十一年(一六〇六)教尊房書写の『八千枚條々用心』には、

一 乳木懸水作法花藏院御説

烏瑟沙摩解穢の真言五百遍を誦じ、杵を以て之れを加持す云々真言に曰く、

唵瑟哩麼々哩麼哩瑟々哩娑縛訶



写真3

次に水三勺乳木の上に懸け廻す。細き方下云々

また、この記述に続いて、「表紙右下に慈光院常住とある『八千枚法則』」を取り上げている。

乳木洗日記

先ず机一脚、灑水・塗香・五鈷・火舎等在る所へ隨身す可し。

先ず烏枢沙摩解穢の真言

オーン修利摩利摩々利摩利修々利娑婆賀

次に抹香を浄水に入れて五古杵を以て水を加持する事五百遍、右の手に杵を持ち五古を以て加持し、左の手の数珠を以て返数を取り、加持念数五百畢り、

その後行者洗う。乳木に香水を三杓汲み懸けく可し、続いて承仕洗うべし。

以上の記述を勘案して筆者の場合、四斗樽に水を満たし、その中に抹香を入れて、烏枢沙摩解穢の真言五百遍を手伝いの者と共に誦した。その後、四斗樽の中に乳木一把ごとに入れて洗って、干して乾かした。(写

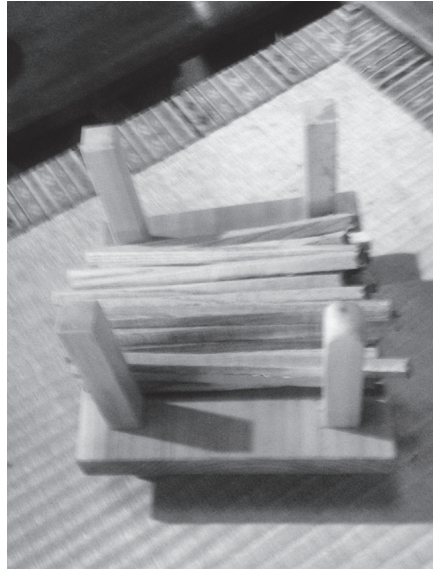


写真4

仮金剛盤を四つから五つ用意すべきとする。「要記」では、薄い板を扇の竹に張るときの台紙のような形であるとする。上下の長さが違うのは、乳木の形が、もとは太く、末は細くするからである。四方に柱を立てて、其の柱を板の下に抜き出して四脚とする。これは本金剛盤の上にかぶせるのであるが、その際、乳木を載せても転がり落ちないようにするためである。

筆者の場合は、滝谷不動明王寺に伝わる仮金剛盤を参照して、本金剛盤に合うように自分なりに二つ作成した。個数については実際に使用した時、それで十分間に合った。(写真4) 結願の座の取り扱いについては、別記する。

真3)

(五) 仮金剛盤について

四つ五つ調うべし、薄き板にて扇の地紙如し。向こうは広く前の方は狭くす。是れは乳木の本太く、末細き故なり。其の四方に柱を立て、其の柱を出して板の下に抜き出し、四の脚と為す。四脚を付ける事は、本金剛盤の上に二十一支の乳木有るが故に独古は左の脇机に置くべきなり。四本の柱を立てることは百支の乳木を載せるに転落せざらしむが為なり。

(八丁右)

(十六) 護摩炉について

護摩の時、前行二七日の間の護摩の爐壇を用いると、又改め用いる爐壇をと両様有り。両様意樂に任すべし。中に前行三七日の初めに之を作し、改めて用いる様、宜しきなり。八千枚を焼く爐に乳木多く焼く故に。常の爐より深く大にして念を入れ、塗り調うべし。若し前行二七日の爐を用いば、此の意得有るなり。又、爐を塗る時、本尊の方の爐の縁を本尊の方へ一尺余り塗り出すべし。八千枚を焼く時、其の塗り出す爐の縁において、爐中の乳木を鉢み出し焼く。是を以て塗り出す所の爐縁二寸余り厚く塗り、少し凹（ナカクボミニス）べし。又、塗る所の爐并に縁、能く干し乾すべし。又、塗る時、細かなるスサ「切」を入れて塗るべし。若しスサを入れず、又干し乾かさざれば、正焼の時、爐破れて火漏るべし。八千枚の時、別して爐を念を入れるべきこと肝要なり。又云く。或は爐、桶に水を溜め爐の下に置き、或は爐の底を金の網にして其の下に火鉢等を置く義有り。此れ等の義宜しからざるなり。

又、他所において用う鑄物の爐は是れ如法の本義に非ず。土を用いて塗り調うる本義也。（五丁左―右）

三週間の焼八千枚護摩の修行の間、前行からの護摩壇をそのまま使用する場合と、正行の座で改めて護摩壇を用意する二つのやり方があるが、どちらも都合で選んでかまわないとする。八千枚を焼く炉については、乳木を多く焼くことから、常の炉より深く、また大きくして念を入れて土で塗り調えなければならぬ。また、炉を土で塗り造る時、本尊の方へ炉の縁を三十七センチほど塗り出す。それは、炉中で燃えている乳木を取り出して、そこで燃やすためである。その塗りだした所の炉の縁は六センチほどの厚さにする。そして中くぼみにして乳木が



写真5

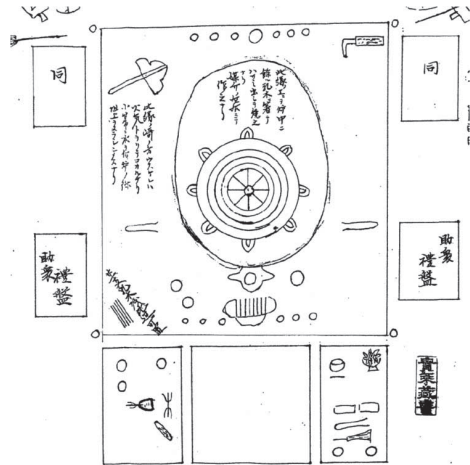


図1

周囲にこぼれないようにするのである。土で造った炉はよく乾かさなければならぬ。さらに、土で炉を造る場合は、土の中にスサ(藁等)を入れて造る。スサを入れず、十分に乾かさなければ、本番の時、炉が破れ壊れるからである。また炉の下に水桶あるいは炉の底を金網にして、その下に火鉢を置くことは、宜しくないとする。「要記」を見ると、どうやら護摩炉は土ですべて造るらしい。それ故、最後に鑄物の炉は如法ではなく、土で塗り調えることが本義であるとす。

炉の作り方も様々であるようである。これは行者の工夫するところに依る所もあるかもしれない。炉壇の図が、講伝所所蔵の荒谷実乗師の折紙に残されている。(図1) 実際に荒谷純光阿闍梨が修行された護摩炉もそのように作成されている。(写真5) それを見ると卵形に炉が造られ、炉の本尊側が広く取られている。

筆者の場合は、「要記」に「本義に非ず」とされているが、諸般の都合により、通常使用している護摩炉に補助炉を付け加える形で八千枚用の炉とした。その作り様は、護摩炉上辺の形状に合うように、スサ入りの粘土をこねて形成し、その上に漆

で記載した中で伝授されたものと相違があるならば、その責任はすべて筆者自身にあります。どうかご寛恕いただきますことをお願い申し上げます。

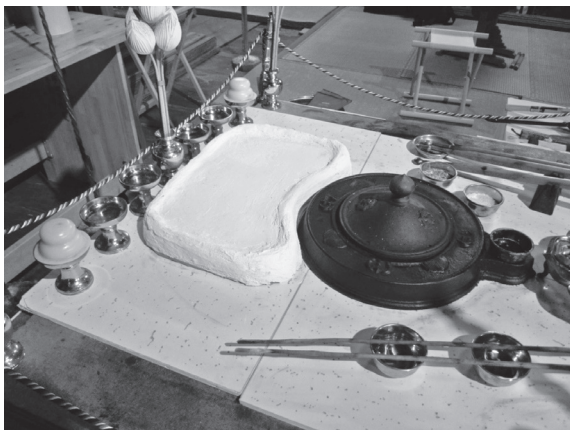


写真6

喰を塗って作成した。また、護摩壇自体が乳木を燃やすことによつて、熱で護摩壇が損傷しないように、炉と壇の間に石膏ボードを敷いた。(写真6)

以上、焼八千枚護摩供修行を入れるためのいくつか用意しなければならぬ物を「要記」にしたがって、覚え書きとして記した。その他、実際の結願で使用する物や承仕等の役割と修行の流れについて書き加えなければならないが、紙面の都合上、次回の機会に譲るところとする。

追記 焼八千枚護摩供を、滝谷不動明王寺ご住職荒谷純光阿闍梨から簿徳愚才の筆者へ伝授していただきました。しかしながら、ここ

参考資料

密教辞典編纂会『密教大辞典』縮刷版 法蔵館 一九八三年

中川善教『八千枚護摩供』第一書房 一九八五年

大瀧清延編『焼八千枚修法の意得』青山社 二〇〇二年

矢板亮岳『齊菜食念誦二十万遍 断食八千枚護摩供修行』私家版

池口恵観『焼八千枚護摩手鏡』私家版

荒谷実乘筆写『八千枚護摩供』智山講伝所蔵

荒谷実乘筆写『用意・遍数・助衆・壇図』一包 智山講伝所蔵

* 講伝所蔵の二つの資料については、講伝所常在所員 田中

悠文師のご厚意により拝見することができました。あらた

めて感謝申し上げます。

牧野富太郎原著『新分類 牧野日本植物図鑑』北隆館 二〇一七

年

註

(1) 一八一〇頁下

(2) 一八一頁上

(3) 智山文庫所蔵 棚番号二七・箱番号五一・箱内番号四一

(4) 二二九一頁上

(5) 大正蔵七八卷二四九五番六七六頁上

(6) 『梵和辞典』六七九頁

『新分類 牧野日本植物図鑑』三八六頁

(7) 不空訳『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦

儀軌法品』大正二一巻一一九九番五頁上

(8) 智山文庫所蔵 棚番二九箱盤一五箱内番号三一

(9) 二六七頁

(キーワード)

八千枚護摩 八千枚作法聞書 八千枚要記 滝谷不動明王寺